

明暦の酒田町大火

今から12年前の昭和51年(1976)10月29日、最大瞬間風速26mという強風のもとに、延々11時間にわたって市の中心街を焦土と化し、焼失規模では全国で戦後4番目となった酒田大火の記憶は、まだ新しい。酒田は、近世まで大火に見舞われることの多い町であった。

この絵図は、明暦2年(1656)5月2日夜、酒田の突抜(つきぬき、現在の内町)から出火し、折からの乾燥した東南風におおられ、704棟を焼失した際の範囲を、朱線で示した酒田町絵図である。慶長6年(1601)4月、最上義光が亀ヶ崎城を攻略する時に酒田の町を火攻めにして焼き払ったという記録はあるが、その実態は明らかでない。明暦の大火は、この後に登場してくる酒田で最初の大火であり、その焼失範囲を記したこの絵図は、正確な記述をともなうものとして貴重な史料となる。

出火場所の突抜とは現在の本町と内町通りの交差点付近であり、絵図に朱点で表示されている。また、火元を清治郎宅と絵図に明示してあるため、この大火を清治郎火事ともいっている。

しかし、出火原因は明らかでない。庄内藩酒井家の記録『大泉紀年』明暦2年5月12日の項には「酒田にてこの節物騒がしく、火付のものが徘徊しているようなので、警衛を嚴重にするため、各番所の人数を増加する」との記事があり、このころ、放火事件が相次いでいたことを伺わせる。

この明暦大火の焼失区域を、大火から2か月近く経過した6月29日に、酒田36人衆の一人で町年寄であった加賀屋与助が、酒田町絵図に朱線で書き記しておいたわけである。さらに、この大火から164年後の文政3年(1820)6月に、何某かがこの明暦絵図を20分の1に縮小して書き写したものがこの絵図である。なおこの絵図は、内町組大庄屋伊東家文書の中に含まれていたものである。

明暦2年の大火は、強い東南風(ダシの風)のもとに、内町、本町、中町、肴町から北西方向に延焼し、日和山下の荒町、獵師町(現在の船場町)まで、704軒を焼き尽した。この時の酒田の総戸数は1,277軒であり、大火で町の過半を焼失した

ことになる。

この大火を契機に、防災面を考慮した町割がさらに推進されていく。まず、町の南北方向への延焼を食い止めるための防火線である「松原地」が設置された。松原地とは、この絵図に「本町と中町との間一丁目より秋田町迄、横三間ほど家作らず明け置、三尺ばかり内外へ小松を植付申すべく……」とあるように、本町と中町との間に6m幅の空間地を設け、両側に松を植付けるものであった。

その後、享保11年(1726)、宝暦元年(1751)、同8年(1758)の1,000軒以上を焼失する大火を経て、東西方向への延焼を防ぐための「広小路」が設けられた。この広小路は、20m幅の道路で町の中心地を東西に分断するものであった。やがて広小路に植えられた柳が成長し、いつのころからか広小路は「柳小路」と愛称されるようになった。奇しくも昭和51年の酒田大火では、この柳小路をはさんだ東側一帯が焼失した。

江戸時代、酒田において100軒以上を焼失した大火は45回の多きに及ぶが、大火発生日と月平均風速・湿度との関連はないだろうか調べてみた。その結果、月平均風速・湿度と大火発生日とはかなりの関係があることがわかった。つまり、春秋の乾燥期における強風時に、特に“火”を大切に扱い、失火しないように注意すれば、大火発生回数を減少することができるという、極めて一般的な提言が可能なことである。このことについては、昭和62年3月に刊行された『酒田市史』上巻に、「酒田の月別大火発生回数と風速・湿度との関係グラフ」として記述しているので、ご参照いただければ幸いである。

全国にその名を知られる酒田の豪商本間光丘は、明和2年(1765)、34歳の時、「他出留守中家内制詞之覚」9ヵ条の最初に、「御公儀からの触れ出しは控えおき、火の用心第一に守ることを掲げており、火の用心を最重点にしていた。このことは現代にも通ずる大事なことである。

(土岐田正勝 酒田市立酒田中央高等学校教諭)

一内町 一三町
一市町 一六町
一町 一七町

一町 一八町
一町 一九町
一町 二〇町

一町 二一町
一町 二二町
一町 二三町

一町 二四町
一町 二五町
一町 二六町

一町 二七町
一町 二八町
一町 二九町

一町 三〇町
一町 三一町
一町 三二町

百拾五軒

一市町

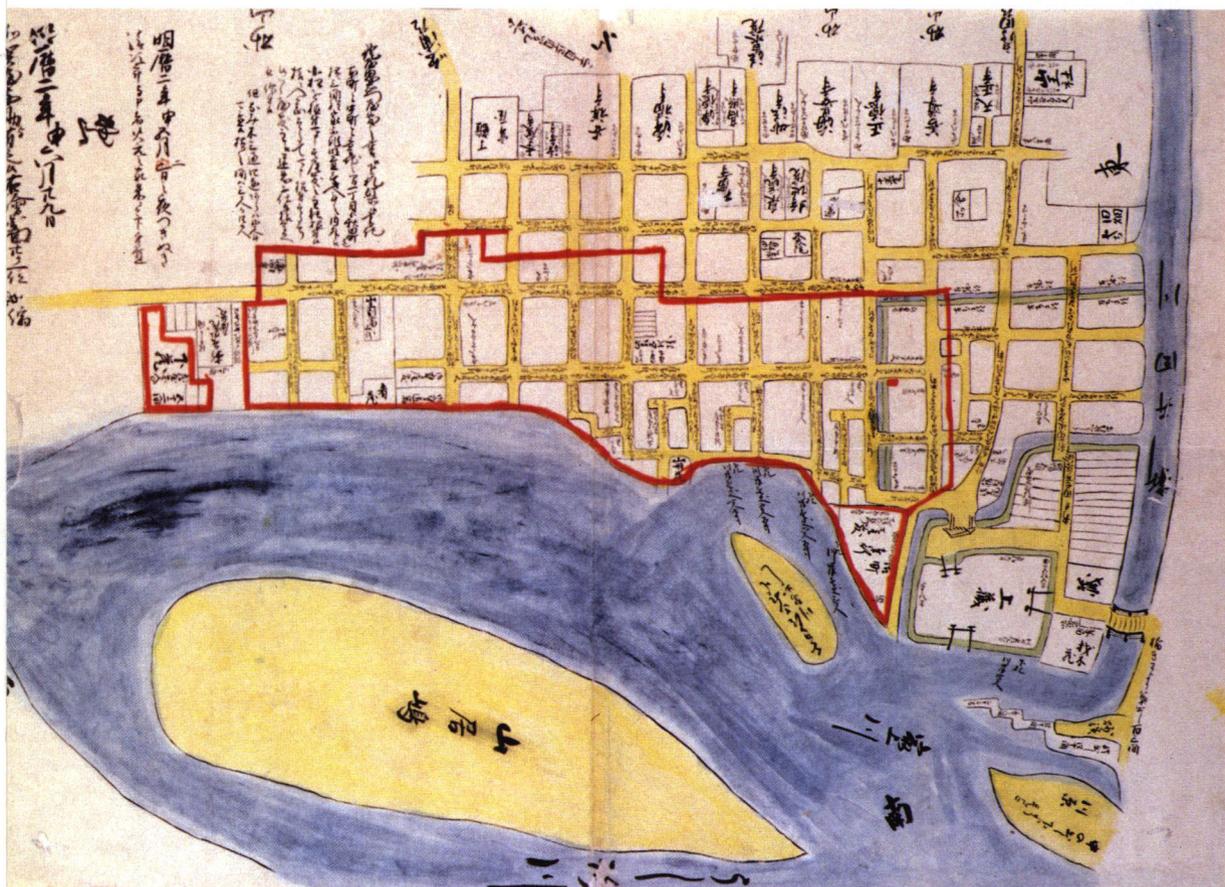
八軒

一掃部頭 拾六軒

一町 六軒

一町 八軒

一町 九軒



明暦の酒田町大火(酒田市立光丘文庫蔵)